

# 危機にさらされる命救え

# 神戸の医師「りがZGO」

発展途上国で衛生環境の改善などの支援に取り組もうと、神戸市在住の若手医師らが非政府組織(NGO)を結成し、ケニアやハイチで活動を始めた。難民キャンプや大地震の被害など

の課題を抱える現地を調査、衛生指導や医師教育にも関わる。メンバーは「神戸を拠点に草の根で活動を広げ、現地の人たちと顔の見える関係を長く続けたい」と話す。(岩崎昂志)

中心となつてゐるのは、兵庫医科大病院(西宮市)呼吸器外科の大類隼人医師(30)=神戸市中央区、兵庫県災害医療センター(神戸市中央区)救急部の甲斐聰一朗医師(29)=同=。

きっかけの一つは、東日本大震災だった。2人は宮城県南三陸町などで医療支援に取り組み、「日本ですらインフラが崩れれば、命が深刻な危機にさらされる。途上国はそれが日常」と以前から構想していたNGO「ユーチャーコード」を結成。

行政書士やIT企業勤務の友人らに声を掛け、現在は約10人で活動する。9月には、ケニアを約1カ月訪問。ボリオ対策

として子どもへのワクチン接種運動に参加した。都市部を除いて集落ごとの人口数や地図などの基礎情報もなく、ワクチンの認知度も低い。山中の集

落を訪ねて子どもを探しあた。「毎日8時間は歩く体力仕事。村人に信用してもらうために、村長を説得するところから始めた」と大類医師。



ケニア・ダダープの難民キャンプで人々の健康状態を調査する大類隼人医師(中央左)と甲斐聰一朗医師(同右)=フューチャーコード提供

## ケニアやハイチ衛生環境改善を支援

衛生面では、屋外で排便する現地の風習が気掛かりだった。そこで、村人を集めてトイレの重要性を説明。「きちんとないと菌が飛び散る。パンや水に便が付いているのと同じ」とかみ砕いて話した。甲斐医師は「途上国で命を守るためには、『保健』の考えが欠かせない」と強調する。

大類医師は「これに先立つ5月、メンバーの森田佳奈子さん(32)=大阪市西淀川区=の協力を得て、ハイチを訪問。現地で医療支援に長年取り組み「ハイチのマザーテレサ」とも呼ばれる日本人医師須藤昭子さん(84)と深刻な医師不足対策を検討。ハイチの医師を育てるため、兵庫医科大に招く計画を具体化させた。大類医師は「僕らができるのはほんの少しのこと。それでも現地の人とつながり、命を守る活動には無上の喜びがある」と話している。

連絡先はメールinfo@future-code.org